新著紹介

○聚落と地理　小田内通敏著　古今書院發行

最新刊　定價貳圓三十錢

本書は菊版三百頁の小册子であるが挿圖七十五といふのに見ても、いかに体裁の整つた書であるかゞわかる、重な論文は聚落と地理、武藏野の聚落、日本の人口論、地域研究の地理的基礎、之に加ふるに歐洲に於ける村落社會研究の地理學的傾向といふ報告と樺太、朝鮮、滿洲の三地方について、著書自からの調査見聞の報告と、まづこうした聚落論、人口論、調査報告といふ三部門から成立つてゐるとみてよい。小田内君が我國人文地理學の熱心な研究家であり、特に聚落研究に專心してゐられることは明治四十一年以後の君の業績によつて明である、本書を通覽して、いかに君がこの方面に研究心を刺激されてゐられるかゞ愈明になつたと信ずる。實に同君は早稻田大學に於て大正十一年九月、聚落地理學の開講を試みられた時、この學問に關する同君の抱負を述べられた通り(その文は本書にのつてゐる)、全く我國では未開拓の原野に最初の鋤を入れられたのである、誠に健羨に堪えない。そこで今日この册子となつて、小田内君のこうした功績が世に輝いてゆくことは誠に結構なことである。同君は本書に於て新しい地理學徒に向つて、村を觀る眼を開けといはれる、氏の語をかれば「幼さものに村を觀る眼を與へる事は地方農村問題の根本であり基礎である、そしてそれが師範教育の一大眼目となればならぬ」と絶叫されてゐるが、さてこれを見るためには古文書學的の智識と民俗學的の教養と、神社や寺院にある實物などの眞僞を見分る考古學的眼識がゐる、さうして其上に地理學的眼識がゐると說かれてゐる、してみると村を觀る眼は今の我々には仲々六ヶ敷て明けさうにもないらしい。氏はまづ村の姿を觀、次に村の生活にふれ、それから村の文獻をさぐり、最後に村の資料を集むべきであると、論じられてゐるが、本書には其のカテゴリーで觀られた村の實際の例は出てゐない。予は小田内君の不退轉の精進によつて、我々學徒が栞ともなるやうな、村の觀方の實例を今後次に出版されんことを囑望し、且この書の廣く江湖に重んぜられる事を祈るものである。(藤田)

○Cf. W. Tyrrell: Principles of Petrology, 1926　¥ 5,20

本書は岩石學に關する著書に於いて今日最も缺けて居る所を補ふ爲めに生れたかの觀がある。從つてもう既に多數の人々が本書を手にして居られるとも思ふが岩石の進歩の爲め廣く廣く行き渡る事が望ましい。最近の岩石學に進歩を劃せる時期がありとすれば其れは一九一五年のボーウエン氏が岩漿分化に關する論文を出した時と一九二四年にロンドンに火成岩

生成の物理化學に關する討論の會合が行はれた時期であると言へやう。一九一四年迄火成岩石の成因に關する地質學的考察は一先充分に試られて此の年にはウオルフの「火山學總論」やデーリー氏の「火成岩と其の成因」と稱する樣な立派な著書が出た。然し翌年ボーウエン氏の論文が出てから其の後の十年は火成岩の成因を物理化學的研究する著しい新生面が急速に開拓せられた時期で此の十年の終り近くにはニグリーの「鑛物及び岩石學」やベツケの「物理化學的岩石學」等の良書が出た。然し十年間の異狀なる物理化學的岩石研究の時代を經てロンドンに會合した岩石學者の意見を綜合して見ると其處に疑問として殘されるものがやはり數多あつた。アルカリ岩の問題等は勿論其の一例である。此處で學者は多少冷靜に歸へり一九一四年代迄の地質學的考察の結果をも省る樣になつた。一方此の間他の地質學の分科として構造地質學が異狀なる進歩をなしつゝあつたので岩石學は此の影響をも逃れる事が出來なかつた。斯くして岩石學は此の新しき二方面を取入れて漸やく記載科學即ち岩石分類學の位置を脫する事が出來やうとして居る。

本書は十年間の興奮時代が經過した後に新裝を調へて世に出た岩石學原論であつて火成岩だけに就いて見ても岩漿進入の力學岩漿分化の化學、火成岩の時間空間に於ける分布等地質學の三大要素に萬遍なる考察を加へて居る事が嬉しい。全書を三篇に分ちて火成岩、水成岩及び變成岩とし、第一篇は火成岩の形態と石理、岩漿の鑛物學及化學的成分、火成岩の成生、顯微鏡構造、火成岩の分類、火成岩の時間空間に於ける分布、火成岩の成因の八章に分ち、合計百七十頁を占め、水成岩は六章に分けて八十頁、更に變成岩は七章に分けて八十六頁を占めて居る。第一章の序論及び索引を入れて三百四十九頁より成る手頃の著書である。(H)

O. S. J. Shand : Eruptive Rocks, 1927

¥ 10.00

火成岩研究者としてシヤンド氏の名が出でたのは既に古い事である。著者は本書を出版されたのは大いに言ひ度い處があつたからである事が自ら窺知せられる。序文に依れば著書は三つの主張を以つて本書を書かれたのである。其の一は火成岩の名稱を整理する事、其の二は主張の第一の結果として當然生ずる岩石學新分類法の提唱、而して其の三は火成岩を他の科學分科殊に鑛床學等に對して緊密に交渉せしむる事から成立して居る。

今日まで火成岩の名稱は徒らに繁雜のみならず、其の個々の名稱の間に何等の重要さを表示すべき特徴がなかつた事は實に初學者にとつては此の上もない不便であつたばかりではなく、研究者にとつては不便であつた事は勿論であつた。例へば我々がダイオライトと稱し、シヨンキナイトと稱する時兩者の間に如何なる特徴あるかは說明されなければ知る事が出來ない。然して我々が之れに就いて多少知識を持つとき如

何に前者が地球上に廣く且つ多量に分布されるに反し後者が狹く且つ少量に産すに過ぎないかに驚ろかされるであらう。本書は此の點に關し過飽和岩（硅酸が過飽和の狀態にあり、從つて岩石中に石英の結晶を持つもの）飽和及び中間岩（石英及びフェルスパソイドの何れをも含まざるもの）不飽和岩（斜長石を含まざるか或はフェルスパソイドを含むもの）の三大群に火成岩を分類して居る。斯の如く分類せんとする傾向は近來の火成岩學に於いては漸やく顯著であつて、最早火成岩をアルカリ岩とカルクアルカリ岩とに二大別す習慣はそろ〳〵止めてもよいと思はれる頃である。何となれば所謂アルカリ岩の産出は地質的に甚だ重要であるにしても地球上に産する量は餘りに少く且つ限られて居るからである。

著者は後に凝固して火成岩となるべき岩漿に就いて、單に無水硅酸鹽類のみを決して重要して居らない。其處に含まれし氣發成分及び岩漿溜の周壁をなす岩石の同化に最も注意を拂つて居る。之れは一九一五年以前の傾向でもあり、又一九二四年後の傾向でもある。殊に純然たるアルカリ岩の成因に就いては如何に多くの實際の例を以つて、之れが主に石灰岩を融解せる爲に生じたるものなる事を證明して居る事よ。

著者は自から分類せる三大群の岩石總論を試るに當つて常に其の産地附近の地質、岩石の成分鑛物及び化石成分を取拂ひ、然る後に各論を述べて居る。産狀を述べるに當つて殊に其の分量を必ず考察せる事は注意すべき點である。各群を我々が今日迄用ゐ來つた、花崗岩、閃長岩、其他の各科に分ち更に然る後にパーアルミナ、メタマルミナ、サブアルミナ及びパーアルカリの四型に分類して全體の系統を整へて居る。全文を分つ事十六章、最後の二章は礦石及び火成鑛床より出來て居る。頁數三百六十、各章の終りに稍多類の參考文獻が載せられて居る。評者思ふに本書の分類法は今後數年或は十年にして多少の修正は加へられるにして岩石分類の一大根柢となるものである。（H）

雜報

○八丈島と青島

八丈島には一日搾乳四斗に及ぶといふ世界的レコードの牛が居る、畜乳牛千八百頭毎年四五百頭（十二三萬圓）を移出し、二百頭を島内で屠殺する、八丈煉瓦會社のコンデンスミルクの工場が神港村にある、この島東西二里餘南北四里周圍十五里餘、島内五ヶ村、七千五百人と稱せらる、初春二月、椿の滿開、盛夏も八十八度位である、物産の主なものは大戰以來炭價の騰貴につれて、木炭年額三十萬圓を第一とし、牛、牛酪、八丈絹、椿油、魚類、菁藻之につぐ、青ヶ島は八丈の東南三十六浬の海上にある周圍約三里の孤島で島周悉く千尺以上の斷崖、纔に一條の羊腸たる急峻の山徑北西の一角に通ずるのみ、碇泊すべき灣なし、しかし島の内部には緩傾斜の地が多いので古くから開拓されて現住九